

世界に広がる友と夢。
～次世代を担うグローバルリーダーとは何か～

目次

Chapter 1 What is Ship for World Youth Leaders?

- 04 私たちにとってのSWY
- 05 事業スケジュール
- 06 参加国紹介
- 07 私たちはなぜSWYに参加したのか
- 09 乗船までのステップ
- 10 よくある疑問を解決

Chapter 2 研修について

- 11 船での生活をのぞいてみよう
- 13 船上で実際に起こった体験談
- 15 さまざまなプログラム
- 23 寄港地活動(ニュージーランド・フィジー)
- 25 給油地(バヌアツ・ソロモン諸島)

Chapter 3 プログラムを終えて

- 27 SWYで学んだこと
- 29 事後活動とは

帰国報告会スローガン

BLOOM

Be a Leader, Open Others' Minds

1. プログラム終了後もひとりの人間として、
またリーダーとして成長し続け、
それぞれが個性溢れる花を咲かせたい。

2. 世界各地に帰国した私たち参加青年自身が、
それぞれの場所で周りの人たちと一緒に、
より良い世界や人生のために花を咲かせていきたい。

当日スケジュール

時間(分数)	内容
12:30	開場
13:00	開会の挨拶(小野田審議官)
13:10	内閣府青年国際交流事業の説明
13:25	世界船報告 オープニングムービー
13:27	報告会実行委員長からの言葉
13:30	世界船概要説明
13:40	セミナーについて
13:50	コースディスカッションについて
14:10	文化紹介:クラブ活動・寄港地・ナショナルプレゼンテーションについて
14:25	ナショナルプレゼンテーションのダイジェスト映像
14:28	参加青年による経験の共有(3名)
14:45	休憩
15:05	自主活動について
15:20	船上生活について
15:30	事後活動について
15:40	全体まとめ+冊子説明
15:45	ブース&相談タイム
16:20	アンケート記入
16:25	閉会の言葉
16:30	閉会→現状復帰
17:00(予定)	完全撤収

略称一覧

次世代グローバルリーダー事業 「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」	SWY
参加青年	PY
日本参加青年	JPY
外国参加青年	OPY
既参加青年	Ex-PY
ナショナル・リーダー	NL
サブ・ナショナル・リーダー	SNL
アシスタント・ナショナル・リーダー	ANL
アシスタント・グループ・リーダー	AGL
「世界青年の船」事後活動組織	SWYAA
日本青年国際交流機構	IYEO
国立オリンピック記念青少年総合センター	NYC

What is Ship for World Youth Leaders??

11か国より集まった青年と、船上で約一カ月間にわたる共同生活を行います。
異なる文化、個性を持った多種多様な人々との関わりを通して、
異文化理解能力、コミュニケーション力、リーダーシップ能力を鍛えることができます。
寄港地訪問では、現地青年との交流や、政府機関への訪問、社会貢献の現場の視察を行い、
世界的共通課題についての知見を深めます。船上では、自らの夢を発信し、
又世界の青年たちが抱く夢を共有することで、
社会にどのように貢献していくのかを具体化するきっかけともなります。

<平成 28 年度 事業スケジュール>

2016

- 9/10-15 事前研修 →詳しくは 9 ページ

2017

- 1/21-28 出航前・陸上研修
- 1/29-3/3 船上研修
- 2/12-14 寄港地活動(ニュージーランド) →詳しくは23ページ
- 2/17-20 寄港地活動(フィジー) →詳しくは24ページ
- 3/3~4 帰国後研修



私たちにとってのSWY

地球に生きる一人として、
世界と繋がるきっかけ

人生を大きく変える
ターニングポイント!

平成28年度参加青年に

「あなたにとってSWYとは？」

を聞いてまとめました!

Beautiful
Experience

世界中に友達ができる



家族!
世界中に
頼れる人ができた!

国境を超えた
強い絆

世界の見方が変わった

人生が豊かになる

「世界」だけでなく
「自分」を発見する、
見つめ直す時間

Super-eye opening

事業スケジュール

参加国紹介 (国順は国連方式)

(東回り)		平成28年度次世代グローバルリーダー事業日程(案)								
				午前① (陸上)9:15～10:30 (船上)9:30～10:45	午前② (陸上)10:45～12:00 (船上)11:00～12:15	午後① (陸上)14:15～15:30 (船上)14:15～15:30	午後② (陸上)15:45～17:00 (船上)15:45～17:00	夜 (陸上)20:00～21:00 (船上)20:00～21:00		
1	1月17日(火)			外国参加青年来日						
2	1月18日(水)			時差調整・体調管理	10:00～12:00/12:00～14:00 オリエンテーション、歓迎会					
3	1月19日(木)	地方プログラム		地方プログラム(表敬訪問、歓迎会)						
4	1月20日(金)			地方プログラム(ホームステイ)						
5	1月21日(土)			OPY: 地方プログラム(ホームステイ) JPY: 出航前研修						
6	1月22日(日)			OPY: 地方プログラム(東京へ移動) JPY: 出航前研修						
				アイスブレーキング						
7	1月23日(月)	陸上研修		全体オリエンテーション			異文化理解セミナー①(対人関係)	クラブ活動紹介		
8	1月24日(火)			都内視察					NP練習	
9	1月25日(水)			リーダーシップ・セミナー①			コース顔合わせ	LG、委員会決め	委員会活動	
10	1月26日(木)			コース・ディスカッション①			課題別視察		NP練習	
11	1月27日(金)			スポーツ＆レクリエーション①			休日			
12	1月28日(土)			NP①(各国事情紹介)			コースディスカッション②		オリセン退所説明	
13	1月29日(日)			プロジェクトマネジメント・セミナー①			横浜港へ移動	乗船	ADMオリエンテーション	
14	1月30日(月)			9:00-10:30 / 10:45-11:00 / 11:15-11:45 出国手続き、船側オリエンテーション、避難訓練		13:30-15:00 / 15:00-15:30 オープンシップ、出航式		16:00 横浜出港	管理官講話	
15	1月31日(火)			リーダーシップ・セミナー②			船長講話	委員会活動	心理学セミナー	
16	2月1日(水)			休日						
17	2月2日(木)			スキルセミナー①			NP②(文化紹介)日本、トンガ、ニュージーランド			
18	2月3日(金)			異文化理解セミナー②			NP②(文化紹介)コスタリカ、カナダ、ウクライナ、フィジー			
19	2月4日(土)			PYセミナー①			NP②(文化紹介)エジプト、ブラジル、インド、ケニア			
20	2月5日(日)			コース・ディスカッション③			休日			
21	2月6日(月)			リーダーシップ・セミナー③			クラブ活動①			
22	2月7日(火)			PYセミナー②			委員会活動	デリゲーション・ミーティング	アドバンスセミナー (選択制)	
23	2月8日(水)	入港9:00 出港19:00		ポートビラ寄港(給油・給水)						
24	2月9日(木)			アドバイザー・セミナー			コース・ディスカッション④			
25	2月10日(金)			PYセミナー③			公式写真撮影	ブリッジツアー	アドバンスセミナー (選択制)	
26	2月11日(土)			リーダーシップセミナー④			14:15-15:15 団長講話	訪問国活動準備		
27	2月12日(日)	入港9:00	オークランド入港	訪問国活動(ニュージーランド)						
28	2月13日(月)			訪問国活動(ニュージーランド)					レセプション	
29	2月14日(火)	出港18:00		訪問国活動(ニュージーランド)					オークランド出港	振り返り
30	2月15日(水)			公式写真撮影			クラブ活動②			
31	2月16日(木)			休日						
32	2月17日(金)	入港14:00		訪問国活動準備			スバ入港		レセプション	
33	2月18日(土)			訪問国活動(フィジー)						
34	2月19日(日)			訪問国活動(フィジー)						
35	2月20日(月)	出港12:00		スバ出港		振り返り	委員会活動	デリゲーション・ミーティング		
36	2月21日(火)			スキルセミナー②			クラブ活動③			
37	2月22日(水)			コース・ディスカッション⑤			スポーツ＆レクリエーション②			
38	2月23日(木)	入港12:00 出港22:00		プロジェクトマネジメント・セミナー②			ホニアラ寄港(給油・給水)			
39	2月24日(金)			事後活動セッション①			キャリアセミナー (管理部主催、選択制)			
40	2月25日(土)			事後活動セッション②			エキシビション(クラブ活動の成果発表)			
41	2月26日(日)			休日						
42	2月27日(月)			異文化理解セミナー③(Re-entry)			サマリー・フォーラム準備			
43	2月28日(火)			リハーサル			サマリー・フォーラム			
44	3月1日(水)			評価会			修了式	下船説明	フェアウェルディナー	
45	3月2日(木)			下船準備						
46	3月3日(金)	入港8:00	東京帰港	11:30 解散式・解散交歓会	下船	(外国参加青年は成田空港へ、 日本参加青年は帰国後研修へ)				
47	3月4日(土)			日本参加青年帰国後研修						

ブラジル連邦共和国



カナダ



コスタリカ共和国



エジプト・アラブ共和国



フィジー共和国



インド



日本国



ケニア共和国



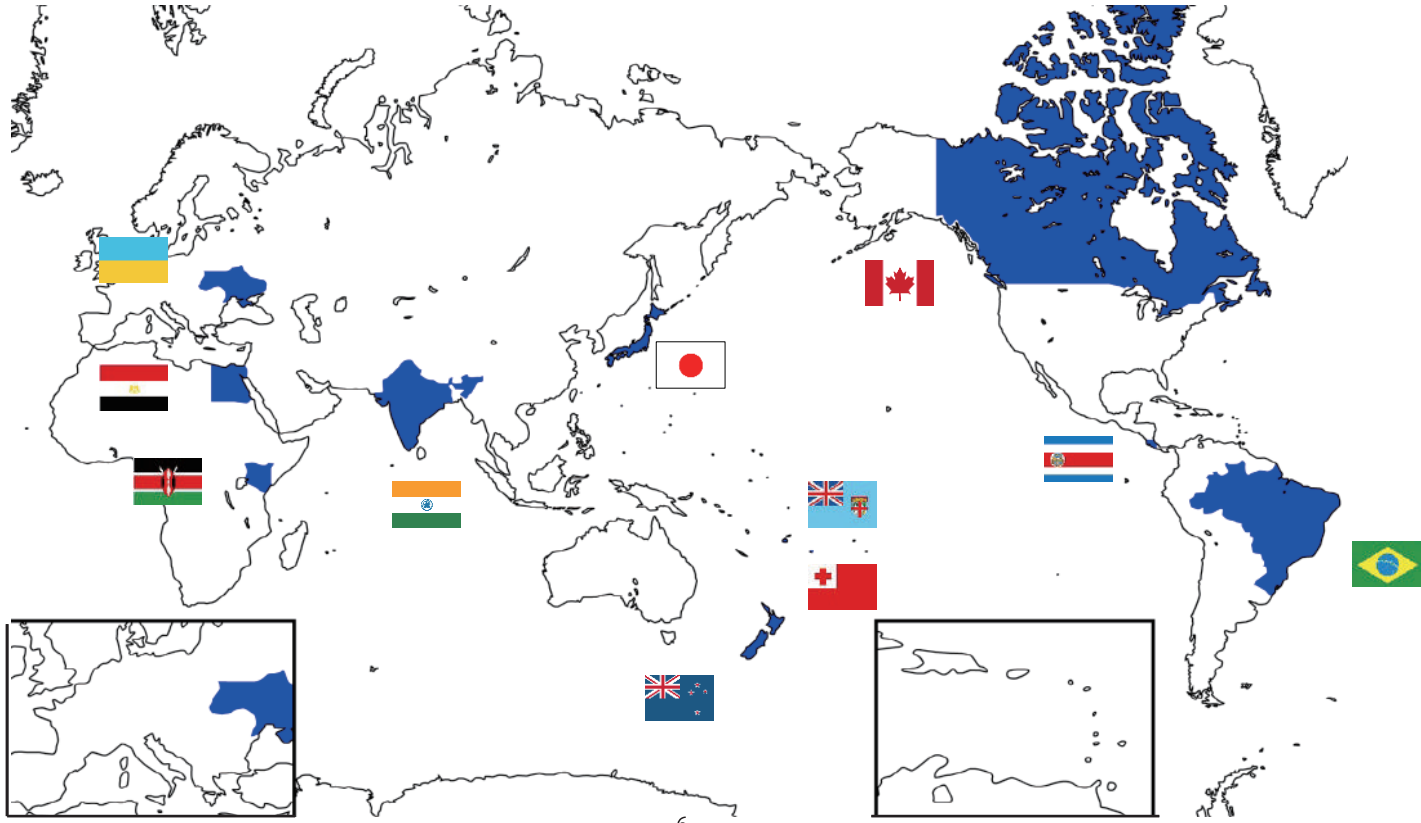
ニュージーランド



トンガ王国



ウクライナ



SCHEDULE

私たちはなぜSWYに参加したのか

SWY29既参加青年が
本事業に参加した理由を
まとめました。

世界に挑む

世界のリーダーたちとの対話
自分の英語は通用するのか
世界規模で取り組みたい活動がある
アイデア、スキルを発信

国際交流

独自文化を紹介したい
異文化体験
友好関係構築
相互理解

触発

既参加青年の話を聞いて
衝撃的な出会い
先輩への憧れ

勉強、投資

世界中の人々と学びたい
新たな考えを養いたい
経験値を高めたい
リーダーの資質を身につける
社会問題を考えたい

タイミング

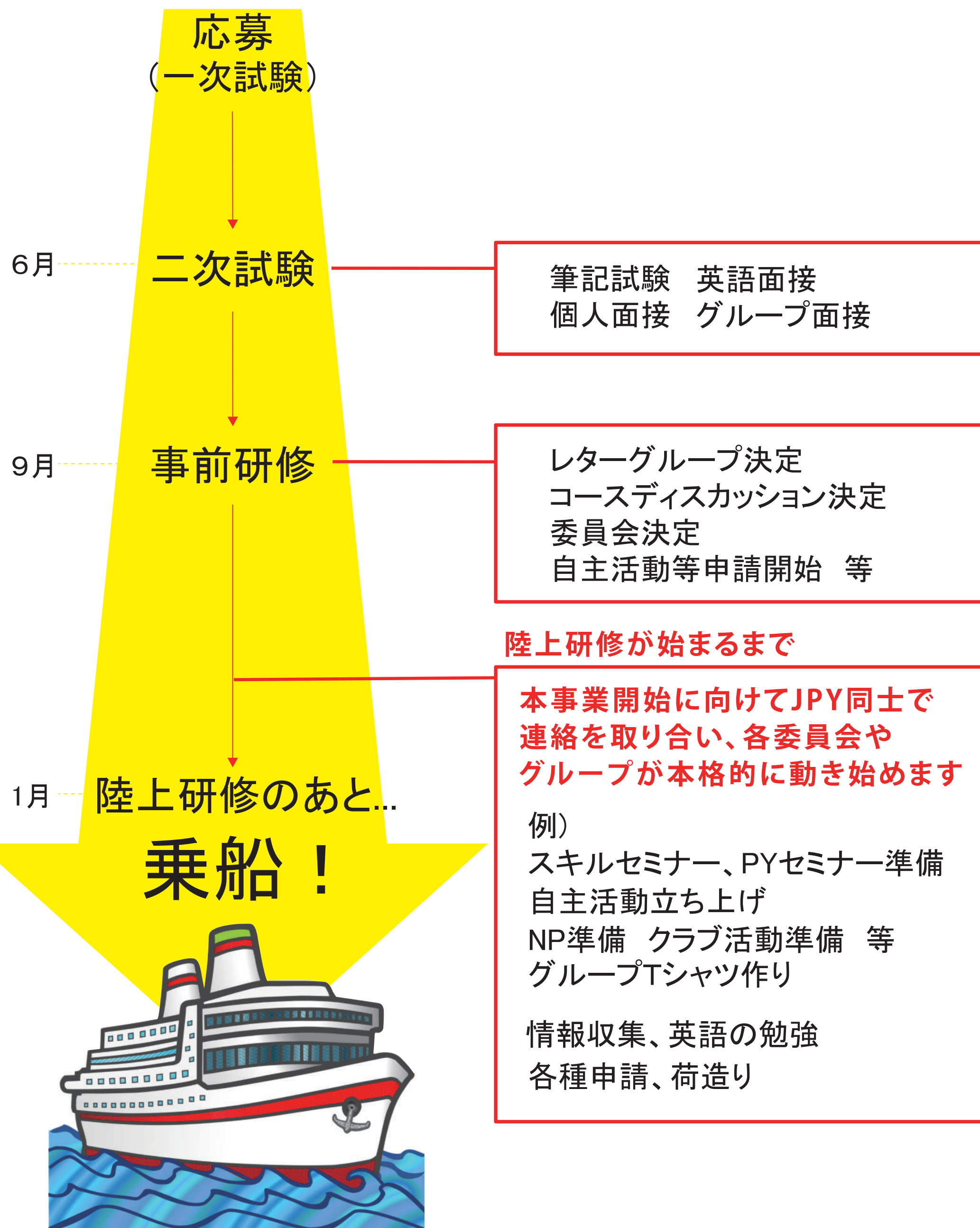
今しかできないこと
セルフマネジメント
もう一度人生を振り返る

好奇心

船上生活とは
ネットのない環境で過ごす
ホームシックでも逃げられない
地球規模のシェアハウス
国境のない世界

SCHEDULE

詳しく知りたい！乗船までのステップ



よくある疑問を解決！



乗船までの間、英語力向上に向けて具体的にどのようなことをしましたか？

英語はそんなに勉強しませんでした！
勉強より、ヒアリングに慣れておこうと思って
映画やTED x のプレゼンを見てました。

日常会話：ぶつぶつ英語で独り言を言う。
国際情勢：話題を広めるため、日頃のニュースで気になったことをメモし、
関連する英語記事を探して読む
→時間があれば内容をレポートする。

新聞を毎日読んで、興味ある記事を
ノートに一つ選んで貼り、英語で感想を書きました。
感想を書く事で自分の意見をまとめる
練習にもなりました。

大学内で留学生が集まる場所に積極的に行ったり、
Skypeで海外の友人と話したりなど、
英語で会話する機会を多くつくった。



SWYに参加することを、学業や仕事とどのように折り合いをつけましたか？

船上研修と大学の期末試験が重なっていたので、
事前にそれぞれの授業の先生に相談し、
特別措置として試験をレポート提出に変更してもらいました。

人生一度きりなのでやりたいことをやろうと思い、
一次試験を受ける段階で会社に伝えました。
会社からは受かったらぜひ参加して、学んだことを
職場で生かしてくださいと返事をいただきました。

大学4年生で乗船しました。学業は単位をほとんど取り終わっていたので
特に心配事はありませんでした。就職活動は5月に終わっていました。
内定者向けの課題や顔合わせが2月(船上研修中)にあったので
事前に人事の方と相談し、出発前と帰国後すぐに個別で面接をお願いしました。

SWYに行ったら自分の視野が広がるだろうと確信していたので、
思い切って仕事を辞めました！

他にも聞きたいことが
たくさんあると思います！
小さなことでも構いませんので
気軽に聞いてください♪

研修について



船での生活をのぞいてみよう！



【起床・就寝】

キャビンは一部屋3名です。国籍が異なる参加者同士の組み合わせで、朝や自由時間、夜などたくさんの時間を一緒に過ごします。朝は各国の用意した音楽が目覚ましとして船内放送で流れていました。キャビンごとで行った出し物「タレントショー」では、特技やダンス、芸などを披露し絆を更に深めました。



【食事】

豪華なビュッフェ形式の食事のメニューは毎日変わるので飽きることがありません。参加国の料理やイスラム教の戒律に沿ったハラルフードを出してくれたり参加青年全員が毎日の食事を楽しんでいました。また、数日前にお願いするとケーキを準備してくれるサービスがあり、参加青年の誕生日のときは食堂でお祝いしたこともあります。



【コース・ディスカッション】

船上研修中の主な議論の場です。各青年は「ダイバーシティ推進とインクルーシブ社会の実現」「防災活動のための人材育成」「平和構築のための対話型アプローチ」「国際貢献活動」「責任あるツーリズム」「青年のエンパワメント」といったテーマの中から関心のある分野を選択し、そのコースに所属します。陸上研修と船上で全5回のディスカッションの時間があります。(詳細は15ページ)



【委員会活動】

参加青年は各自異文化理解セミナー委員会、リーダーシップセミナー委員会、プロジェクトマネジメントセミナー委員会など11の委員会のうちどれか1つに所属し活動します。委員会によっては参加青年自身でいちからプログラムを作り上げるものもあります。(詳細は19ページ)



【ナショナル・プレゼンテーション】

本年度のナショナルプレゼンテーションは2部に分かれており、1部では各国の地理や歴史、現代社会が抱える諸問題などについて発表しました。2部ではダンスや楽器の演奏等のパフォーマンスを通して自国について紹介しました。日本参加青年は120人全員で全9演目のパフォーマンスをチームに分かれて披露しました。(詳細は22ページ)



【クラブ活動】

クラブ活動は各国が文化や言語などを教えるクラブを1つ運営します。日本のみエイサー&よさこいクラブ、書道クラブ、武道クラブと3つのクラブ活動を企画・実施しました。各参加青年が興味のあるクラブを選んで参加し、最後にはエキシビションという発表会で披露します。(詳細は22ページ)



【自主活動】

自主活動は公式プログラムではないため、場所、時間、内容も全て参加者で決めることができます。参加青年はそれぞれの得意分野や興味があるものを他の参加青年に伝えるため、プログラム前から準備をします。公式プログラムの時間以外で行うため、早朝や深夜になることもあります。写真のソーラン節の活動は朝6～7時にデッキに出て海風にあたりながら実施されました。(詳細は20ページ)



【デリゲーション・ナイト】

船上の夜は1～3か国が共同でその国の文化や食べ物を紹介するパーティを主催する日があります。主催国ではない参加青年は主催国の伝統衣装を着たり、その国の作法を学んだり、より各国について知る機会になります。日本ではテーマを「祭り」とし、47都道府県の物産展や祭りで行われるヨーヨーすくいなどを行いました。写真はコスタリカとブラジルが行ったラテンナイトの様子です。各国で有名なお菓子や簡単な料理を食べたり、ラテンダンスをみんなで踊ったりしました。

船上で実際に起こった体験談！

一か月間の船上研修を通して、一人一人違う経験をし、いい思い出も、意見の違いですれ違うこともありました。

その中で、普段とは違う環境だからこそ、経験できたことや、学べたことがありました。

ここでは、日本参加青年がそれぞれ経験したことから学んだことを紹介します。

DVDが壊れる！

お気に入りのDVDを持っていったので、いろんな人に貸していました。船での生活も残り少なくなり、ようやくDVDが手元に戻ってきたのですが、もう一度見ようとしたときに壊れているのに気づきました。初めはショックでしたが、一生に一度の空間にいる中でショックを受けている時間が勿体無いと思うようになりました。そこで、私が思いついたのは、その壊れたDVDを一生の宝物にすることでした。歌手がCDにサインするように、参加青年達からDVDにサインをしてもらい、特別な宝物にすることができました。一見ショックな出来事も、見方を変えて楽しんでいる参加青年の姿を見て、私もこのアイデアを思いつくことができました。この経験から学んだことは、発想の転換をすれば、どんなことも楽しめる。船はそんな空間で、そんな人たちが周りにいたから思いついたアイデアだったと改めて感じます。これからこの考え方を実践していきたいと思います。

中村 友梨香



船でのコミュニケーション

ディナーの席で、気づいたら周りはブラジルの参加青年ばかりでした。何人かのブラジル参加青年はお互いに母国語で会話をしていました。すると、彼らのうちの一人が、ここは英語で会話しようと、みんなに注意をしていました。違う言語を話す者同士が集まって起こるこの環境ならではの出来事でした。話す言語一つで、誰とコミュニケーション取ろうとしているのかわかるために、使う言語で、相手を仲間に入れることもできれば相手を除外することもできる。無意識だとしても、異文化の場で、身内だけで通じる言葉や言語を使うことは、ときに相手に疎外感を与えるし、反対に、共通語を使うことで、仲間意識を高めることもできるということを学びました。

また、インフルエンザで隔離されていたら、手紙を書いてくれる参加青年がいたり、復活してキャビンに戻ったとき、welcome back! と大きく書いたボードをドアに張って待ってくれるキャビンメイトがいたこともありました。ネットのない環境で、コミュニケーション一つ一つに手間がかかることは多かったですが、その手間を惜しまずに何かを伝えようとしてくれたことがとても嬉しかったです。普段から携帯を使ったコミュニケーションばかりではなく、もっと原始的な方法のほうが気持ちが伝わる場合もあるし、そうやってしか得られない喜びもあることに気づきました。

大谷 歩



キャビンでの珍事

私は大学生の傍、DJとして活動をしています。音楽を通して人と繋がれることを幾度となく経験してきました。今回、世界青年の船への参加が決まった時、音楽を通して国籍など関係なく参加青年と繋がりたいと思いました。そこで私は日本からDJに必要な最低限の機材を持って行ったり、事前に参加国の有名な音楽・伝統的な音楽をダウンロードするなど準備を進めました。船上で実際に参加国の音楽を流したときの青年たちの驚きながらもとても嬉しそうな顔がとても印象に残っています。ある青年は「ここで日本人の君が自分の国の音楽を流してくれることがとても嬉しい。」と言ってくれました。その後、多くの外国参加青年がUSBやパソコンで音楽をシェアしてくれるなど、青年たちとの交流が音楽を通して加速しました。これは、音楽を通して人と繋がれるという経験をさらに深め、同時に言語の他にも人と繋がる方法があることを証明してくれました。

大西 拳伍

キャビン374

私のキャビンメイトはニュージーランドの人でした。今までニュージーランドの方と関わったことがなく、最初はとても緊張しました。しかし、お互いが打ち解けるのに時間はかかりませんでした。私たちキャビンはとても仲良くなり、常に一緒に行動していました。彼から学ぶことはたくさんありました。常に、周りの事を考えており、私たちが楽しめるようにとんでもしてくれました。ニュージーランドでの寄港地活動の際も、少ない時間の中で、付きっきりで私たちを案内してくれました。彼は周りにいる人をいつも幸せにしてくれます。私も彼のように、周りの人のために動ける人になりたいです。キャビン、この事業を通して、もちろん各国の文化の素晴らしさも学びましたが、それ以上に、一人一人が、国も文化も関係なく、人として素晴らしい要素を持っていることを学びました。また、今まで知らなかった国が、今では大切な人たちが住む、身近な国に変わっているというのもこの事業の魅力だと思います。

松田 賢人



気持ちを伝える

自分を含む複数の日本参加青年がウクライナ参加青年の態度が多少冷たいのではないかと感じていました。そのような態度が彼らの文化のスタンダードなのか、それとも何か私たちに不満があるのか知りたかった私は同じレターグループのウクライナ参加青年にこのことを相談しました。彼は一部の日本人参加青年にウクライナ参加青年の態度がそのように捉えられているとは知らず、驚いていましたが、すぐに話し合うと約束してくれました。翌日から、彼らの態度が柔らかくなったように感じました。なお、後に、彼らはただシャイだったのだと理解しました。異なる文化を持つ人々と接するときは、片方が常識であるとは限らない。相手の発言、行動、態度がこちらにとって不快に感じるがあったとしても、それは相手が意図したことではないかもしれない。以上のエピソードから、私は日本人でも外国人でも相手の言動で気になったことがあるときは、言葉を選びながら自分の素直な気持ちを伝えるようになりました。

伴場 森一



DISCUSSION

コースディスカッション

ここでは各ディスカッションのコースについての内容紹介や
参加青年がコースディスカッションを通して学んだことなどを紹介します。

※コースディスカッションの概要については P13 に記載しています

コース紹介

ダイバーシティー推進と インクルーシブ社会の実現

未だにお互いの違いからくる差別がなくならない中で、今後グローバル社会で活躍して行くために多様な個性を尊重し、一人一人の可能性が最大限に発揮されることを人々にアプローチできるリーダーシップの向上を目指す。

平和構築のための 対話型アプローチ

国籍、宗教、文化の違いがあり、言語的ハンディキャップを持つ人がいる中で「対話」が有する可能性と難しさを考え、世界において大小様々な対立と向き合う場面で対話型コミュニケーションを成立させるキーパーソンとしての役割を学ぶ。

防災活動のための人材育成

防災は政府の役割が不可欠である一方で社会全体による参加と連携が不可欠である。本コースでは防災の視点をきっかけに参加青年がリーダーシップを発揮して社会に働きかけることが出来る人材育成を目指す。

責任あるツーリズム

現代のツーリズムが訪問地の経済、文化、環境に対して与える負の影響を認識し考える。参加青年は旅行者として、また旅行者を受け入れる訪問地の住居者として、ツーリズムのもたらす結果を考察する。

青年のエンパワメント

エンパワメントとは何かを参加青年達が自ら理解することを目的としている。個人、集団、世界と言う視点を経て参加青年がエンパワーする役割を担う人物の素質を十分に理解し、下船後に社会において個人として取り組める活動を模索する。



参加青年の声

学んだこと、気づき、これからの課題

ダイバーシティー推進と インクルーシブ社会の実現

人それぞれの個性や多様性を尊重すること、多様性とは何かをまず知る事の大切さを学んだ。日本企業における人々の多様性の受け入れは外国に比べて遅れていることが分かった。また、今まであまり意識していなかった LGBT の種類が思っていたより多く当事者の数にも驚いた。これからの課題として、これまで学んだことを生かし自分の周りから多様性を尊重し受け入れあう環境を作っていきたい。

平和構築のための 対話型アプローチ

コミュニケーションで何よりも大事なものは、伝えたい、理解したいという気持ちが最も大切だと学んだ。言語の壁によって、戸惑いや苦しい思いもしたが相手も必死に理解しようとしてくれ、対話の持つ重要性を再認識できた。あえて問題の起きる場面を想定したロールプレイを実践することから相手の主張を受け入れ、自分の考えを伝えることが問題解決になることを学んだ。これからの課題として対話を通して個人、組織、社会をつなげていきたい。

防災活動のための人材育成

地域のコミュニティ、災害発生時の情報の共有がいかに大切かを学んだ。東日本大震災を機に日本が中心となって世界の防災意識を高めていることに驚いた。国によって頻繁に起こる災害の種類が異なるものの、防災という点では共通するものが多いことに気付いた。また、壊滅的な被害を負った国や地域は自力での復興が難しく、外部からのサポートは重要であることを再認識した。これからの課題として身近な人との間から防災意識を高めていきたい。

国際貢献活動

世界における取り組みの幅の広さと凄み、深みを体験者や実施者との対話を通して「実感」を持って学んだ。普段新聞やテレビで見る国際問題はグローバルな問題ではなく、身近な人々との間で起きており、まず問題に関心を持つことが重要だと気付いた。世界の若者は、世界に対して鋭く「自分には何ができるのか」という視点を持ち続けていることに驚いた。これからの課題としては日本国民として、世界市民としての感覚を備えて自分国際社会に対してできることを模索して生きていきたい。

責任あるツーリズム

今までは訪問地へ及ぼす悪影響など考えていなかったが責任のあるツーリズムとは何かを学ぶことを通して自分たちが参加している事業にも多くの問題があることに気付いた。具体的にはクルージングによるツーリズムは寄港地に一気に多くの人が訪問するため、経済効果も大きい、それと同時にごみの発生などその地域に悪影響が及ぶこともあるということを学んだ。これからの課題として、訪問地への影響を考え、訪問者、訪問地が互いに良い影響を及ぼすツーリズムを広げていきたい。

青年のエンパワメント

互いを信頼し、励まし合い、サポートすることの重要性を再認識した。参加青年の間でエンパワーの持つ力を身を持って実感し、学ぶことが出来た。セッションを重ねるごとに、互いをサポートし合う良い環境を作ることが出来たので普段は発言することが苦手な青年も積極的に意見を交換し合い、各青年が自信を持ってチャレンジすることが出来た。これからの課題として、地域、社会、組織において互いに信頼しサポートし合う環境づくりをリードし、他者の能力を引き出せる存在になれるよう努めたい。

公式セミナー

各専門家である、アドバイザーによるセミナーの時間があります。
これらのセミナーを通し、自分たちのリーダーシップを発揮する機会が数多く設定されました。

< リーダーシップセミナー >

青木 聡美 先生

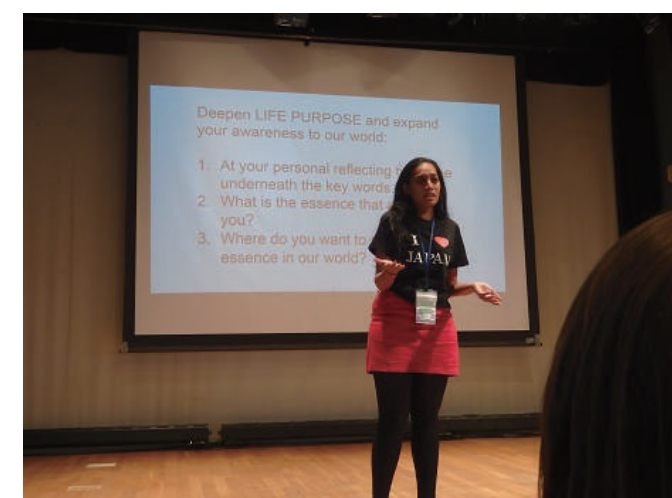
このセミナーでの一番の学びは、リーダーシップには様々な形があるということです。様々なグループやコミュニティで活動していくとき、前から全体を引っ張っていく人、後ろから支えていく人、横からメンバーをフォローしながら動く人など、様々なあり方があります。これらのどの形をとっても、その人に一番適したリーダーシップを発揮することが、仲間と活動するときに大切なことを学びました。このセミナーは、参加青年一人一人が自分のリーダーシップについて考え、行動するためのきっかけになりました。



< プロジェクトマネジメントセミナー >

三好 崇弘 先生

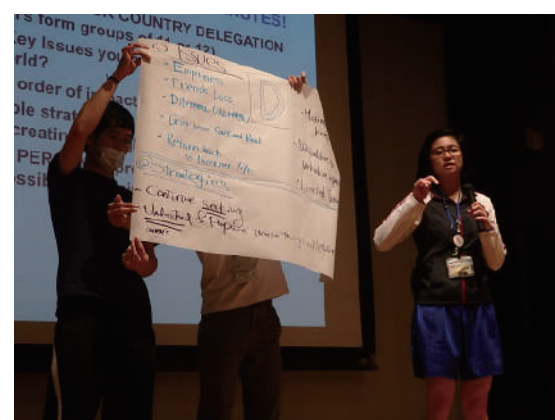
プロジェクトマネジメントセミナーでは、参加青年にとって身近なトピックを扱いながら、活動を進めていくための方法を学びました。自分が将来実現したいことは何か？それを実現させるためには、どのような工程を踏みながら準備を進めていく必要があるのか？その時に直面するであろうリスクはどのようなものか？など、多様なバックグラウンドを持つ仲間と共に新たなプロジェクトを始める時のヒントを学びました。



< 異文化理解セミナー >

Craig Baty 先生

異文化理解セミナーでは、自分たちが持っている各国に対するステレオタイプについて体感するアクティビティを実施したり、各国間の持っている時間に関する概念の違いを、具体的なエピソードを交えながら意見交換する場となりました。自国の文化を背負って参加する参加青年同士、違いを尊敬し合い、受け入れ合い、学びあう姿勢が大切だと学び、実際の活動に活用しながら取り組んでいけるようになりました。



リーダーシップセミナーでの経験

私が船上生活で印象に残っていることのひとつに、リーダーシップセミナーでの出来事があります。船上生活の中盤頃、参加青年同士でペアを組み、「自分の人生の目標(Life Purpose)は何か」を共有しました。私のペアになったのはインドの参加青年でした。彼女は日本人の私とは全く異なる環境で生活していることを始め、弟の成長のため、家族の幸せのために将来成し遂げたいことを話してくれ、時間が過ぎてても話が止まらなかったのを覚えています。

また、私の実現したいことを話すと、丁寧に全てノートにとってくれました。丁寧に私の話を聞き、共有した思い全てを書き残してくれようとした彼女のまっすぐな気持ちと思いやりが伝わってくる経験でした。民族、宗教、国籍関係なく、互いの夢について語り合えたのはプログラムではこれが初めてで、ここから参加青年同士で深くつながり合う第一歩となったセミナーでした。

栗林 文

レターグループ

レターグループとは、日本人青年と外国人青年合わせて約 20 名ほどで構成されています。

A～K の 11 グループで様々な活動を行う基本単位となります。

グループ対抗で競い合ったり、都内視察を通して、多くの経験を共にする大切な仲間です。



実際どんなことをするの？

レターグループでの主な活動は、大きく分けて二つあります！モーニングアセンブリーでの点呼＆体温測定。もう一つは、これからの日程確認や、AGL からの情報共有等を行う、レターグループミーティングです！

毎日、レターグループ毎で集まるので、時間に空きがあれば、みんなで遊んじゃうこともあります！レターグループの絆を深めることが、最高の思い出を作る一つの鍵ですよ！グループ毎にオリジナル T シャツを作成したり、ユニークな掛け声を作るグループもいて、とてもダイバーシティに富んでいます！

レターグループは家族です！

喜び合い、泣き合い、失敗し合い、笑い合い、たくさんの思い出が生まれます！レターグループは僕にとって、本当の家族のようでした。スポーツアクティビティ、都内視察、レターグループミーティングなど、一緒に行くことはたくさんあります。

僕が、自主活動で悩んで、ネガティブになっていた時、同じレターグループのある外国参加青年が、話を聞いてくれた後に何も言わずにハグしてくれました。たったそれだけでしたが、すごく優しく、勇気をもらいました。

困ったら、なんでも打ち明けてみてください。

親身になって聞いてくれる家族がレターグループにはいます。

Letter Group B 幡谷拓弥

COMMITTEE ACTIVITY

委員会活動

委員会とは、陸上・船上でのプログラムをより円滑に、主体性を持って行うために作られており、一人一つの委員会に所属し、それぞれの委員会の役割に沿った活動を行います。

外国参加青年とともに企画、運営をする中で協調性を養い、リーダーシップの育成、そして実践をする場所でもあります。

今年は 11 個の委員会に分かれ、事前研修から主体的にこの事業を作り上げて行きました。

委員会一覧

アシスタント・グループ・リーダー委員会
コース・ディスカッション運営委員会
異文化理解セミナー委員会
リーダーシップ・セミナー委員会
プロジェクトマネジメント・セミナー委員会
PYセミナー委員会
スキルセミナー委員会
ナショナル・プレゼンテーション委員会
イベント委員会
クラブ活動委員会
寄港地活動委員会

寄港地活動委員会

主な活動は寄港地・ニュージーランドとフィジーでのプログラム企画、運営です。

特に大変だった事はフィジーの首都スバの大きな会場で、参加各国の文化を地元の市民の方々へ紹介するステージの準備、運営です。準備を進める中で、直前でないと情報が確定しないこともあり、臨機応変に柔軟な対応をすることが求められました。また短い準備期間の中で話し合い、準備していくことに不安もありました。しかしそんな時も、外国参加青年のメンバーの温かさに救われ、みんなで助け合いながら進めていくことができました。最後にゼロから一つのを一緒に作り上げる素晴らしさを感じ、困難な状況を仲間と協力して乗り越えられたことは、私にとって大きな自信になりました。

中村 友梨香



ナショナル・プレゼンテーション委員会

私たちはまず日本全体のコンセプトと NP2 部目の内容を決定し 9 月の事前研修で全員へ周知、120 人でそれぞれが出演する演目を決定しました。

NP1 部目では本番直前まで私たちはどんな日本を伝えるべきかと委員メンバーを中心に議論を重ねました。準備していく中で日本について知らないことが多くあることを痛感し、日本について調べる中で知識を増やすこともできました。意見を出し合う段階では、全員が誰の意見も否定せず、お互いの考えを理解しようとする委員会メンバーの姿勢から、私は多くのことを学ぶことができました。

NP2 部目では事前研修のあと本番へ向けて準備を進めました。遠隔で準備を進める難しさを実感すると同時に、遠隔にいるからこそ練習の進み具合など相手を信じて任せることを学びました。また、プログラムが始まってからは、練習のスケジュールを考えたり、他国が発表するときの照明や音響のアシスタントをしたりなど NP が円滑に進むよう努めました。インフルエンザで活動休止期間があり練習時間が短くなるハ

プニングはありましたが、参加青年 240 人が一丸となり成功させることができました。数々の委員会がある中、この委員会に所属し委員会メンバーを中心に全員と一つのを作り上げられたことは私の誇りです。

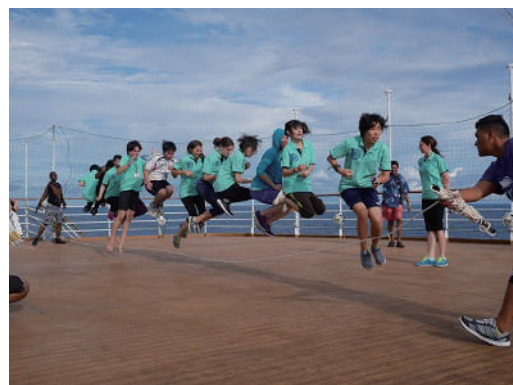
中神 晴野



イベント委員会

この委員会では、スポーツ大会、脱出ゲーム、フェアウェルパーティ等の企画・運営を担当しました。委員会活動然り本事業における行動スタンスは本人の意思に任されていました。とことんやりたいと思えば土壌は無数にあり、そうでなければ役割から逃れられる方法は無数にありました。この様に「自由」な雰囲気の中、委員会のメンバーの中にも当然活動に対する温度差がありました。文化も考え方も発言スタイルも異なるメンバー同士且つ「自由」な雰囲気の中、どうすれば一致団結して取り組むことができるのかを考えました。入念に連絡をする、個人的に会話をして信頼関係を築くなど、試行錯誤はしたものの明確な答えは見つかっていません。ただ一つ言えるのが、想いを持って何かに取り組んだ時は必ず協力してくれるメンバーがいたことです。直接関係のないメンバーが積極的に関わってくれたことや、自身にできないことを助けてくれたメンバーがいました。取り組む前は漠然とした不安がありましたが、思い切ってやってみることで様々な協力者が周りにいることが実感でき、助けてくれるという素晴らしい経験ができました。

川口 健太



自主活動

休日や夜の自由時間を使い、参加青年が自主的に企画する活動。青年の自由なアイデアや様々な国・地域の文化を発信、共有しました。

Mt.Fuji Night

外国・日本参加青年に、山梨県の紹介や特産品のPRし、たくさんの人に魅力を伝えることを目的に「Mt. Fuji Night」を開催しました。



私は現在「地域おこし協力隊」として山梨県で活動をしています。観光パンフレットには載っていない、地域に住んでいるからこそ知っている情報を発信することを目指し、山梨県のユニークな文化や地元の人と富士山の関係性、特産品の説明をし、最後に協賛品の試飲試食会を行い、参加者にはアンケートを提出してもらいました。

嬉しかったことは、「地域の人の暮らしぶりを聞いて、訪れてみたいという気持ちが高まった。」「地域の文化やライフスタイルを体験してみたい。」などの参加者からの声。この活動

を通して「富士山だけじゃない山梨県の魅力」を伝えることができたことは、私の大きな自信となっています。この活動の実施にあたり、実際に地域に住んでいながらも知らなかったことが多々あり、自分自身勉強をしながら準備を進めてまいりました。その中で、山梨県内の多くの企業に協賛品のご協力をいただき、山梨県の魅力を伝えることができたことに心から感謝しています。また、たくさんの参加青年が事前の準備、当日の運営に協力してくれました。皆のサポートがとても心強く、仲間の絆を改めて実感しました。



折り鶴

当初の企画では、「折り紙」を日本の遊びの一つとして紹介する予定でした。しかし今回の寄港地であるニュージーランド、フィジーが近年、地震やサイクロン等自然災害に見舞われていた事を知り、何かできる事はないだろうかと考えていました。そこで、ドネーション活動として千羽鶴を作成し、各国に贈呈する為の自主活動を実施。活動当初は、二千羽を作成する事は容易な事ではない、またこの活動に賛同してくれる人はいるのか等、不安な気持ちがよぎりましたが、チームのメンバーを始め、多くの人が協力してくれました。そして、二千羽の鶴を完成し、レセプションにて贈呈する事ができました。また嬉しい事に、ウクライナ、コスタリカの参加青年が自国で折鶴の取り組みを拡げてくれました。この経験より、共通する目標に向かって団結する事により、結束力が芽生え不可能を可能にするという事。そして、「平和」を思う気持ちは国籍、宗教に捉われず、万人に共通していることを学びました。

澤 知夏

Kagoshima Night

SWY29 で掲げていた目標「One PY One Challenge」。私にとっての挑戦はこの「Kagoshima Night」の開催であった。この挑戦は 9 月の事前研修直後から、「協賛品集め」という形で始まった。協賛品募集について鹿児島県の地元紙である南日本新聞へ掲載して頂いたことで、様々な企業の方とお会いすることができ、その結果、多数の協賛品を頂戴することができた。直接各社の商品に対する情熱、故郷鹿児島への想いを伺ったことで、Kagoshima Night 成功への重責を感じての乗船となった。



向けて、当日まで、集客方法、ブースの配置などの運営方法といった考えなければいけないことがたくさんあったが、その中でも一番考慮したのはアンケートの回収方法だ。協賛品としていただくからには、企業の方にも何かプラスになるようにしたいと来場者へアンケートをとることをお約束していたものの、実際来場者にとってアンケート記入は面倒なものであり、回収するのは難しいということは承知していた。そこで、上図のように、スタンブラリー形式にし、①各ブースで試食・試飲②アンケート記入③ブース担当者にサインをもらう④サインを規定数以上もらえば、アンケート回収場所でくじを引くことができるという来場者の流れを作った。結果的に 113 名の方がアンケート記入に協力してくださった。

全体としても来場者から大変ご好評で、鹿児島の良さを知ってもらう素晴らしい機会となった。これを機に参加青年が実際に鹿児島を訪れ、協賛していただいた企業の製品を手にとる機会に繋がることとなれば嬉しい。

日本のナショナルリーダーが「SWY で人生が変わる」という話をしてくださった時、たった 43 日間で人生が変わるわけがないと思っていた。けれど、今ならわかる。中学 3 年生のときに東京から引越してきた私は今までどこか鹿児島を卑下していたところがあり、なるべく早く鹿児島から出たいと常に思っていた。しかし、Kagoshima Night を主催したことにより、改めて鹿児島の素晴らしさを再発見することができた。そして素晴らしい技術を持っている方がたくさんいるにも関わらず、それを上手く外へ押し出す力がなかったり、それを受け継いでいく人がいなかったりという現実も目の当たりにした。これから PR 会社で働くので、マーケティングの方法などを勉強して、将来鹿児島の力になりたいと思う。

宗村 奈津

他にも、様々な自主活動が開催されました！

Career Night ... キャリア、ビジネスを通して世界貢献や世界との繋がりを考える参加青年の交流の場。

そろばん教室 ... 日本の伝統であるそろばんの普及を目的に開催。

映画上映会 ... エジプトやウクライナで起きた革命についての映像を上映。

など

PY セミナー・スキルセミナー

参加青年による参加青年のためのセミナー

PY セミナーは、参加青年が「社会貢献」という大きな枠組みの中で、
自分自身の活動経験・専門知識などを活かして行うセミナーです。

また、今回から始まったスキルセミナーでは、船上での生活や下船後に活かせるスキルを共有し、学び合うことができます。

セミナーを運営することで、プロジェクトマネジメント力やリーダーシップを身に着けることもできます。

どちらのセミナーも、実践的なワークショップや小グループでのディスカッションなどを通して学びを深めます。

PY セミナー

エコツーリズムとアマゾン熱帯雨林(ブラジル)
日本人のブラジル移住ー歴史と遺産(ブラジル)
コスタリカの歴史保護(コスタリカ)
ハイブリット戦争-軍事力を持たない
次世代の戦争への関わり方-(ウクライナ)
働く女性を取り巻く環境(日本)
歯医者に通う回数を減らすには?(エジプト)
将来の理想の自動車(日本)
他

スキルセミナー

ビジネススキルを学ぶ(日本)
動機付け面接法(日本)
効果的な外国語学習法とは?(日本)
様々な場面での交渉術を学ぼう(ケニア)
共感的コミュニケーションとは?(コスタリカ)
他

各セミナーの体験談①

私は3人の日本参加青年と協力して「ZENの精神セミナー」を企画しました。座禅、禅の考え方をすることで、周りに惑わされることなく、心の平静を保つことが出来るすべを身に付けてもらい、船上生活の中でストレスを感じた際にうまくコントロールするスキルを学んでもらうという内容です。セミナーの前半は禅の概念を紹介しました。また、弓道や座禅の体験を通して、呼吸法や瞑想の仕方を学んでもらい、セミナー後には数人から座禅のやり方を知ることが出来て良かったという声を聞きました。

今回のセミナーを開くに当たって、今まで漠然としていた禅の考え方をもう一度確認し、他人に説明できるように学びなおしました。そこから新たな発見をすることも多く、自分自身にとっても多くの学びとなりました。また、大切にしていたはずの考え方を疎かにしてしまっていたことにも気づき、もう一度自分の生活態度を考え直す機会にもなりました。参加者からの感想を聞いたところ、自分の国で禅寺に通っている外国参加青年がいたり、これから仏教の考え方を学んでみたいという声があったりしました。

関谷 昂

各セミナーの体験談②

私は「効果的な外国語(英語)学習法」というテーマで、どのようにすれば外国語をより効果的に学ぶことが出来るのか、応用言語学(第二言語習得)を基に考えるスキルセミナーを行いました。

言語学習には大きな誤解がたくさんあり、それらの一部をこのセミナーで解くことができたと思う。言語習得の不思議と奥深さについて知ってもらったと同時にグローバル社会における外国語スキルの重要性について伝えることができたと思います。

鯉淵 健太郎

各セミナーの体験談③

参加青年が様々な国から参加しているため、専門分野に関するセミナーだけでなく、それぞれの地域性や歴史に基づいたセミナーも多くあったことが印象に残っています。「カナダ先住民の排斥の歴史」など日本ではあまり知ることのできないようなトピックについて、実際に関わっている参加青年から直接聞くことができるのも、PYセミナーの魅力の一つだなと感じました。

またスキルセミナーでは、「相手の話を聞き、相手の自立性を引き出して、自発的に行動を変えていく手助けをする」ための『動機付け面接法』という方法を学ぶことができました。下船後の活動を通して実践しながら、このスキルをさらに自分の周りにも広めていきたいと思いました。

糸数 貴子

ナショナル・プレゼンテーション

ナショナルプレゼンテーション(NP)とは陸上研修と船上研修で2部構成で行われ、参加青年がそれぞれの国にまつわる文化、経済、歴史、社会について発表し合う、本事業の中のメインイベントの1つです。

『おお!!!』という歓声と鳴り止むことのない拍手。はじける笑顔で抱き合う姿がNPの成功を物語っていました。チームジャパンのNPのテーマはBUSHIDOU～NIPPON SPIRIT2017。武士道、日本の魂を外国参加青年に感じてほしい、そして日本代表である私たち自身も日本人としての自覚と誇り、武士道の精神を感じたい、そんな想いを込めました。世界の解決しなければならない多くの問題に世界のリーダーとしてどう向き合うか。日本の目まぐるしく変化し続ける社会の『動』と自分たちの心の中にある『静』を融合させ表現するのは容易なことではなく、何度も話し合いを重ねました。そして、心から笑えること、笑顔`がもたらす柔らかな空間やそこから生まれる人と人との絆が世界の問題の解決に繋がるのではないかと考えました。

NP1 は日本が抱える問題として、自殺者数や食料廃棄量の数字を効果的に使い、心に訴えかけるスピーチ形式のプレゼンテーションをしました。外国人参加青年だけでなく、私たち日本人の心の静かなる使命感を触発し、これから始まる旅に武者震いしました。

NP2 では外国参加青年は各国12人であるのに対し、日本は120人。全員参加にしようと決め、9月の事前研修で出演する演目を選びました。事前研修後参加青年は各地域に散らばったため練習が進まず、もどかしい日々が続きました。いざ1月の陸上研修が始まり限られた時間の中で仕上

げようとしていた矢先に、インフルエンザによりリハーサルの時間が短くなるなどの大幅な変更を余儀なくされ、果たして成功するのかと不安になりました。そんな困難な状況の中、仲間で意見し合い、もがき、ぶつかり合いながらも新たな策を模索し続けました。ひとつ、ひとつ乗り越えるたび、既存のものより深みが増していく感覚がありました。そして迎えた本番。

躍動感に溢れるエイサーを皮切りに気品溢れる日本舞踊、静と動のバランスの取れた空間を演出した武道、伝統的な音楽を奏でた和楽器、迫力満点の和太鼓、力強さとしなやかさを融合した書道パフォーマンスと創作ダンス、現代の日本をポップに表現したヲタ芸と続き、壇上で繰り広げられるドラマはエンディングのよさこいへ向かいました。そして最後のポーズが決まった瞬間、一瞬の静けさは割れんばかりの拍手喝采へと変わり、頬を伝う光の粒がNPの成功を物語っていました。

日本人として、日本の伝統文化やポップカルチャーを海外参加青年に向けて発信する事は、日本への愛を深め、日本人としてのアイデンティティを再認識できる機会になりました。それらは、日本にいては感じることでできない、この事業でしか経験できないものでした。なにより、同じ目標に向かって練習を重ねた仲間は一生の友であり、その思い出もまた、一生忘れることのない人生における青春のページとなりました。

住岡 尚紀

クラブ活動

クラブ活動とは、各国がそれぞれの文化を紹介し、お互いに学びあう活動です。
主催側になり、自国の文化を紹介したり、参加側になり他国の文化を学んだり、必ず一人一つのクラブに所属します。
活動の最後にそれぞれのクラブの成果を発表する場があり、クラブごとにパフォーマンスをします。

書道クラブ

書道クラブの活動では、まず書道の概念を英語で伝えることの難しさを、身にしみて感じました。海外にはない思想や概念であり、英語で説明することが難しかったです。そんな中、外国参加青年がとても熱心に取り組んでいたことが、一番印象的でした。見本を熱心に見て、何度も繰り返し練習し、“はらい”や“はね”など上手いかわからない所を何度も積極的に質問していました。日本の文化に強く興味を持ち取り組んでいる姿を間近で見て、とても嬉しく、日本の文化、書道を誇らしく思いました。書道に対する気持ちが私自身変わりました。また活動発表の場でのパフォーマンス後に、たくさんの参加青年から感動したという感想をもらい、書道クラブで活動できて本当に良かったと思いました。

中村 友梨香



よさこいエイサークラブ

日本の伝統芸能であるよさこいとエイサーを通し、参加青年の日本への興味・関心を高めてもらうことを目的とし、日本参加青年4人でよさこいエイサークラブを運営しました。

最初は、英語で踊りを指導することに不安を感じていました。しかし、メンバー全員に楽しんでもらいたいという想いから、どうすればより分かりやすく指導できるかを考えました。クラブのメンバー以外の外国参加青年の助けも借りながら、一つ一つの振り付けを丁寧に繰り返し指導することを心がけました。密室のスタジオでの練習はとにかく暑く、まるでサウナのようでしたが、発表に向けてクラブ活動以外の時間にも自主練するなど、メンバー全員が意欲的に取り組んでくれました。心をひとつにして踊った本番の感動は、一生忘れられない思い出となりました。

富永 早咲





1 日目 (2 月 12 日)	
9:00	オークランド港到着 入国審査
10:30 - 11:00	SWYAA ニュージーランドによるオリエンテーション
11:00 - 14:30	フリータイム
15:00 - 18:00	オラケイ・マラエにてマオリの伝統文化体験
18:30	フリータイム
21:45	帰船
2 日目 (2 月 13 日)	
9:00	レター・グループ毎にバスに集合
10:00 - 13:00	オークランド市内の学校にて交流 B グループ: Bairds Mainfreight School C, D グループ: Ferguson Intermediate School E, F, H グループ: Koru School I, J, K グループ: Gladstone Primary School A, G グループ: Avondale Intermediate School
13:30 - 16:30	オークランド・ドメイン訪問 - 昼食 - オークランド博物館見学 - 園内散策
17:00	帰船
18:30 - 20:30	船上レセプション
3 日目 (2 月 14 日)	
9:00	コース・ディスカッション毎にバスに集合
10:00	各訪問先での活動 - DI コース: ASB North Wharf - DP コース: Mount Roskill Grammar School + Peace Foundation - DRR コース: Auckland Civil Defence Emergency Management - IC コース: Unitec w/ Refugee Youth Action Network - RT コース: Arataki Visitor Centre - YE コース: Youthline
14:00	フリータイム
16:00	帰船、出国審査
18:00	出航

Day2 学校訪問・オークランド博物館

防災 (DRR) コースではオークランド市での民間防衛・緊急事態管理センターへの訪問。ニュージーランドにおける防災を目的に調整・組織されているうに、市民の約 8 0 % 以上が地元出身者ではない国際色やダイバーシティが人口を支えているこの都市での防災対策に民間との連携、『コミュニティ』というキーワードが重視されていました。

参加青年は所長である John Dragicevich 氏および危機管理アドバイザーの Matthew Bramhall 氏を始めとするスタッフの方々とワークショップを行い、主に津波警報への対応を想定した模擬実践訓練を体験。命に関わる臨場感あふれる現場での管制官としての責任感や指令などを学びました。



寄港地として私たちのために様々な準備を行い、訪問活動中のサポートを行ってくれたニュージーランド参加青年と既参加青年の方々には第 29 回世界青年の船一同、感謝しております。

**Day3... コース別視察
-Auckland Council Civil Defence Center-**

Day 1 ... マオリ文化 -Orakei Marie-

ニュージーランド先住民族マオリの聖地へ。神聖な雰囲気に参加青年は固唾を呑みながらもマオリ族特有の鼻と鼻を近づけて挨拶をする「hongi (ホンギ)」という風習を見よう見まねで全員でチャレンジし、マオリ語の歌も歌いました。伝統文化を継承し次の世代へ語り継ぐ為の大切さを全員で学びました。

ランチはフィッシュ & チップスを皆で

オークランド博物館にて語源の比較

『君も近い将来グローバルリーダーになれるよ』と伝える現地 NZ 参加青年。10 段階の学校レベルがあり、入学時に審査基準や条件が政府から設けられている。

1 日目 (2 月 17 日)	
14:00	スバ港到着
15:45 - 16:30	青年スバーズ省と SWYAA によるオリエンテーション
17:00 - 18:00	Civic Center にて歓迎セレモニー (NL, SNL, ANL はにっぽん丸船内にて首相表敬)
19:00 - 21:00	船上レセプション
2 日目 (2 月 18 日)	
9:00	コース・ディスカッション毎にバスに集合
9:30 - 12:30	各訪問先での活動 - DI コース: Fiji National Council for Disable Persons - DP コース: University of the South Pacific - DRR コース: Fiji Red Cross Society - IC コース: Japan International Cooperation Agency (JICA) - RT コース: Fiji Museum - YE コース: Parliament of Republic of Fiji
13:00 - 16:00	フィジー博物館にて昼食後、フリータイム
16:30 - 17:30	船内にて Cultural Night の準備
17:30 - 18:30	夕食
19:00 - 21:00	ボーダフォンアリーナにて Cultural Night
21:30	帰船
3 日目 (2 月 19 日)	
9:00	バスに集合
9:30 - 15:00	村訪問 A, G グループ: Nakini Naitasiri B, H グループ: Nakaulevu Community, Serua C, I グループ: Naganivatu Village, Naitasiri D, J グループ: Sawani Village, Naitasiri E, K グループ: Kasavu Village, Naitasiri F グループ: Galoa Village, Serua
16:00 - 20:00	フリータイム
20:00	帰船
4 日目 (2 月 20 日)	
7:00 - 10:00	フリータイム
10:00	帰船

コースディスカッション別に、障がい者の雇用促進支援施設、大学、赤十字社、JICA、博物館、国会議事堂といった場所をそれぞれ訪問しました。障がい者の雇用促進支援施設では、視覚障害者へ裁縫を教え、生業にできるよう訓練しており、どんな人にも雇用機会を作る場が大切であることを学びました。フリータイムでは、街の人達から、「船から来たの? 今日の夜のイベント楽しみにしてるよ」と声をかけられたことが驚きでした。世界各国から来ていること、カルチュラルナイトという各国紹介の発表をすることを知っていたのです。アリーナでの各国のプレゼンテーションは、感動的でした。力を合わせて 1 つのことをみんなで完成させることの喜びと、それを見た人達が笑顔になること、文化や言語、人種、全てが異なっているにもかかわらず同じ感動を味わえたことが嬉しかったです。

Day3

現地の村訪問

Day 1

Fiji に到着し、温かいお出迎えの後、Civic centre へ

Civic centre にて歓迎の儀式に参加

にっぽん丸にてレセプションのディナー

Day2

コースディスカッション別にテーマに分かれて施設視察

カルチュラルナイトの準備

カルチュラルナイト!!!! Vodafone Arena で各国の文化紹介プレゼンテーション

Day4

Fiji お別れ。ソロモンに向け出航!

いよいよ Fiji とお別れです。Fiji の参加青年、既参加青年達が、歌を歌ってくれました。お見送りをしてくれたのは、嬉しくもあり、もった滞りたいという寂しい気持ちもありました。たくさんの Fiji の人達との出会いに感謝し、世界青年の船事業の醍醐味を味わうことができました。



Chapter3 プログラムを終えて

SWYで学んだこと

深い対話を通じて自分の人生に向き合い、周りの人の温かさを肌で感じた 34 日間

外のデッキに出ると、満開の星空に囲まれ、深く吸い込まれそうな青い海の上。壮大な自然の中に身を置くことで日常生活では縛られていた国籍、年齢、性別などから解放され、ひととひとが向かい合って深い対話が始まる。自分のバックグラウンドやアイデンティティ、これからの人生などのパーソナルな話題が自然と始まる非日常な空間。多様性に溢れた青年たちと話す中で、自分自身と真剣に向き合う。19 歳という大人への一歩を踏み出そうとしているこの時期に自分のことを一度立ち止まって見つめる機会を持って、かつ、今まで出会ったこともないようなバックグラウンドを持った青年たちと触れ合うことで多様な価値観を得ることができた。同時に、周りの仲間の温かさをひしひしと感じ、「人間ってこんなに心がキレイで尊い存在であった」と悟った。この事業が始まってすぐは、自分の英語力や年齢によって劣等感を感じていたが、ある時 235 人全員の前で自分の意見を共有する機会を得た。あのとき、とても怖くて震えていたことを今でも覚えている。

しかし、あの空間は私の想像とは真反対のものだった。私の拙い英語でも理解しようとしてくれ、共感し泣いてくれる。「愛で溢れている場所」だった。どんなチャレンジをしてもサポートし受け入れてくれる仲間がいることに気づいた。私は彼らと出会えたことを誇りに思い、これからも繋がりを持てることが嬉しくてたまらない。現在、船を降りそれぞれの場所に戻ったあとも、サポートし信頼してくれる一生の仲間がいる。この事業での経験を活かし、残りの大学生活、そしてこれからの将来を充実させていきたい。私にとってこの事業は人生のターニングポイントになったといっても過言ではない。

石田 祐子



全力で楽しく今を過ごせる自分になりました！

私は大学では国際関係を専攻し、大学院で外交関係や開発協力に関心を持ち、商業ベースのほか開発協力も行っている商社に行くことにしました。この事業には国内外の様々な分野で活躍している人たちが参加されると聞いていたため、事業までに私自身の専門分野や興味のある事柄に関する知識をより深め、それを英語で説明できるように準備していきました。公式プログラム、プライベート問わず、事業中は毎日のように議論をする機会があったため、そうした準備はかなり役立ったと思います。留学経験のなかった私にとってあの約 1 か月間の洋上生活は毎日が新しい発見の連続でした。このような機会はもう今後減多にないと考え、洋上生活で取り組みたいと考えた活動は全て取り組み、やり遂げました。例えば、私は以前経験したソーラン節やよさこいを日本人参加海外青年に披露するだけではなく、一緒に踊ることもできました。委員会活動やクラブ活動等ではリーダーやサブリーダーとしての自分の役割を果たそうとしましたし、その他、それまであまり得意ではなかった英語でのコミュニケーションも積極的にとりました。常に自分の限界かそれ以上のことをしていたと思います。それは周りの方々の大きな支えがあってできたことです。そのような様々な活動を通して、私は船に乗る前よりも、何事にも全力でかつ楽しく物事に取り組む姿勢ができました。

さて、この船には 10 カ国約 120 人の海外青年のほかに、約 120 人の日本青年もいました。海外青年は予めお互いが異文化で生きてきたという理解があるので、積極的にお互いのことを知ろうとします。そのため、多少の文化的背景からくる誤解が生じても対話することで解決できます。しかし、船で一ヶ月以上過ごす中で、私は海外青年とだけではなく、日本青年の間でも異文化ともいえるほど考え方や行動に大きな違いがあることに気づきました。「日本人同士だから相手にも当然私の考えていることが理解できているだろう」という考えでは誤解が生じることもありました。お互いがそれを異文化として認識していない分、海外青年よりも相手のことを理解するのに時間がかかるかもしれません。この人は相性があまりよくないかもしれないと感じても、陸の上ならまだしも船では一ヶ月間毎日顔を合わせる環境です。考えた末に私はそのような人とも海外青年に対してするように、対話を通して相手の考えを受け入れた上で自分の考えを伝えるようにしました。そうすると意外にも物事は上手くいきました。

こうして、私は何事にも全力で楽しく取り組む姿勢や、国内海外問わずどのような人にも自分の考えを伝え、相手の考えを受け入れる姿勢が身につきました。そうした姿勢は今でもプライベートでもビジネスでも生かしています。

伴場 森一

バヌアツへ寄港！

横浜大棧橋から出航して9日、2月9日に給油・給水のためバヌアツ共和国の首都ポート・ビラに寄港しました。バヌアツは80あまりの小さな島々が集まる国で人口は26万人程です。午前中に下船しポートビラのマーケットでココナツジュースを飲んだり、スーパーで買い物をしたり、ウミガメをみて海で泳いだり、博物館を訪れたりと参加青年は思い思いの時間を過ごしました。

現地の方が「僕の村のビーチは凄く綺麗だよ」と、ボートで 5 分ほどの別の島に連れて行ってくれました。現地の子供達は元気で陽気でした！(石川 光代)

タクシードライバーの人がとても良い人でした。この町が大好きなんだって話をしてくれたよ。(大島 みのり)

めっちゃウェルカムだった！写真は、どこの国からきたの！?と聞いてきたおばちゃん。(江藤 由貴)

滝を目指して、自然の中を歩いている時に、偶然遭遇した、現地の家族です！快く一緒に写真も撮ってくれてとても素敵な出会いでした！(´ ▽ `)(松田 賢人)

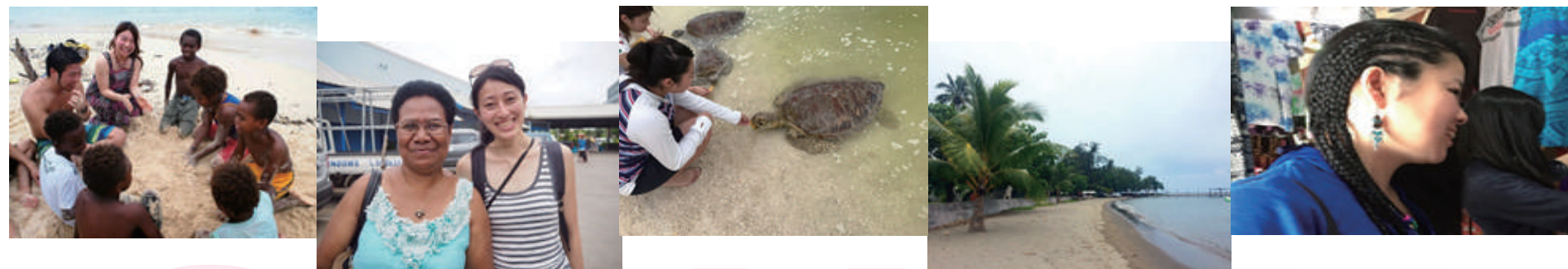
市場で初めてドレッドヘアーに！現地の方に髪の毛を触られながら、日本について、SWY について紹介する良い機会でした。現地の方と触れ合えることができて、生のバヌアツを見ることができたのは貴重な体験でした！(井場 麻美)

Turtle Bay で人生初のウミガメと泳いだよ〜海もとても綺麗で、子ガメも親ガメもいて本当に良い思い出が出来ました！(永井 瑠海)

村を一人で歩いていた時、たまたま出会った赤ちゃんとお母さんがとてもいい人で、家に連れて行ってもらい、少し話して、家に案内してくれました。見ず知らずの日本人を、疑うこともせず温かく迎え入れてくれて、話を聞いてくれて、「本当の優しさとは何か」について考えさせられた一時でした。(宮崎 晴子)

村を散歩していると、色々な人が声をかけてくれ、人々の優しさに触れることができました！(丸山 梢)

バヌアツで作られているコーヒー豆を焙煎しているカフェへ行きました！(仲間 明子)



ソロモンへ寄港！

見上げればどこまでも澄み切った青い空に見渡せば地上を覆う緑のジャングル。

ソロモン諸島は大東亜戦争で攻守の転換点となったガダルカナル島に首都ホニアラをおく島国です。メモリアルで現地の既参加青年から当時のお話を聞いて、一つの史実ではなく、そこにいた人の数だけあった、それぞれのガダルカナルを感じました。今ここにある平和はたくさんの命の上に成り立っているということを改めて実感すると同時に、あの戦争はなんだったのか改めて問いを持つきっかけにもなりました。(ふるた かこ)

ソロモンでは素敵なビーチでソロモンの既参加青年たちが、食事やライブなど歓迎イベントを用意してくれていました。既参加青年との強い繋がりを感じたのと同時に、SWY に参加した一員であることは仲間であるということ、世界中にある SWY ネットワークを実感しました。また、ブラジルの NL(国のチームリーダー)が同期の参加青年と再開を喜び合っているのを見て、私達も何年もしくは何十年後に再会を心の底から喜び合える SWY29 にしたいと強く思いました。(丸山 梢)

ソロモンに到着し、港に降りると暖かい響きの音楽が聴こえ、現地の音楽隊が竹のような筒や木琴のような伝統的な楽器を弾いて出迎えてくれました。近づくと、笑顔を向けてくれ、楽器を興味深げに見ていたところ、触ってもいいよ、吹いてもいいよと、言ってくれました。楽器を鳴らしていると、「SUKIYAKI SONG を知っている？一緒に演奏しよう！」と声をかけてくれました。SUKIYAKI SONG は「上を向いて歩こう」の英語名。なぜこの曲を知っているのかを尋ねてみると、東日本大震災の時に日本の人達を励ます為に歌った曲と話してくれました。日本を知っているだけではなく、励まそうと日本の歌を覚えて演奏してくれていたことに感激しました。世界は繋がっているのだな、様々な人が助け合って世界ができているのだな、と実感できた瞬間でした。一緒に演奏すると、不思議な一体感が生まれ、国や言葉、人種の壁を超え、音楽を通して心が 1 つになることを鳥肌が立つほど全身で体感しました。この経験は、自分は何か他の人達にできることはないか、と強く思える良いきっかけとなりました。ホニアラ港でのこの思い出は忘れられない一生の宝物です。(平中 沙也香・宮澤 未央)



参加青年による感想

If world peace existed, what would it look like? I've seen it with my own eyes: Buyo dancers, Bollywood dancers, Lakalaka dancers and Hip-Hop dancers dance to each other's rhythms. Sumo wrestlers, capoeira fighters and ninjas practice each other's art. Maori, Inuit and Ryukyuan sing each other's folk songs. Christians, Muslims, Hindus and Buddhists revere each other's values. Canadians, Ukrainians, Costa Ricans, Indians, Fijians, New Zealanders, Egyptians, Kenyans, Brazilians, Tongans and Japanese speak each other's languages. We were 11 countries, 240 young world leaders on a voyage to 4 countries for 45 days, with one mission, to better the world. A brief glimpse of the perfect world, where no walls divide us, but one ship unite us: this was my SWY experience.

もし世界平和があるとしたら、どんな風に見えるでしょうか？私は自分の目でそれを見ました。舞踊のダンサー、ハリウッドのダンサー、ラカラカのダンサーやヒップホップのダンサーはお互いのリズムに合わせて踊ります。力士、カポエイラの戦士や忍者はお互いの芸術を練習します。マオリ、イヌイト、ヒンドゥー教徒と仏教徒はお互いの価値観を尊重します。カナダ、ウクライナ、コスタリカ、インド、フィジー、ニュージーランド、エジプト、ケニア、ブラジル、トンガ、日本の人々はお互いの言語を話します。私たちは世界をより良くするために、1つの使命をもって4カ国に45日間を航海する11カ国240名の若き世界のリーダーでした。私たちは壁が私たちを分裂させることなく、一つの船が私たちを結びつける完璧な世界を垣間見ることができました。これが私のSWYの経験です。

Henry Tsang from Canada



"I wish that your participation in this program would lead to the world's happiness and peace. I believe that the true result of this program lies in your life long commitment." said Akie Abe, Japan's first lady, in her specially recorded video message. This was one of the numerous moments of SWY Program that is forever treasured in my mind and resulted in serious resolutions. I am a proud Ukrainian and I love my country, so from participation in SWY29, I first of all expected to learn new ways of improvement of lives of my compatriots. But, with 2 weeks of intense schedule in a contrast culture of Japan and 4 weeks aboard the ship with distinguished teachers and young leaders from 11 countries, granted me with much more than I expected. Apart from Course Discussions (I left piece of heart with my DRR course), we were sharing about our communities and countries, our thoughts on why the world is exploding from conflicts and what are the ways to peace and mutual respect, etc. We had the unique chances to be greeted by heads of states and dignitaries, visit main stakeholders in the areas of our specializations as well as receiving lectures from their senior officials. Impactful information was acquired also during personal communications. We were challenged and stretched. We admired, observed and learned from each other. We supported and empowered each other to become better versions of ourselves. I am endlessly grateful to SWY to have brought me together with smart people from around the world who care and are working on making this world a better place. I feel blessed for the opportunity to now call them my family and I'm really excited to see what is the future that all of us will be shaping now.

“このプログラムへの参加が世界の幸福と平和につながることを願っています。私はこのプログラムの真の成果は、あなたが人生をかけてコミットすることにあると信じています”と、安倍首相夫人がビデオメッセージで語ってくださったことが、私の心の中に深く刻まれ、プログラム全体通した最も大切な思い出の一つです。私はウクライナ人であることを誇りに思っており、自分の国が大好きなので、SWY29への参加することは私のその精神を向上させるものだと思っていました。しかし、日本での2週間の緻密なスケジュールと11カ国の著名な教師と若手指導者との船に乗る4週間の経験は予想以上に多くのことを学びました。コースディスカッション(親愛なるDRRコースメンバー)とは別に、私たちは地域社会や国々、紛争の問題、そして平和と相互尊重への道について話し合いました。

国家元首にお会いするまたとない機会、素晴らしい講義を受けることができました。個人間の会話でも有益な情報を得て、互いに挑戦し成長し、敬意を払い、学びあいました。世界中から優れた人々と一緒に、この世界をより良い場所にするために励むSWYに感謝し続けます。家族と呼べる存在ができたことに感謝し、私たちの将来がどのようなものになるか本当に楽しみにしています。

Alisa Anatoliyivna Berezutska from Ukraine

SWY29 was one of the most life changing, mind blowing, and world-opening experiences I have ever had in my life. Being with 240+ young people from around the world, I experienced a lot of personal growth and development that I could not experience anywhere else. I fell in love with the country of Japan, the people, the culture and the food.

I learnt about local and global topics, and found interest in topics I never knew about. Most importantly, I made strong relationships with those on the SWY leaders program and now have friends all around the world. I stay in contact with them and will visit them soon. They know they are always welcome to stay and visit me.

SWY29は、私の人生で今まで経験した中で、最も人生を変え、圧倒され、世界を広げる経験の1つでした。世界中の240人以上の若者と一緒に、私は他の場所では得られない成長と発展をたくさん経験できました。私は日本や、人、文化、食べ物が大好きになりました。

私は、地域や地球規模の話題を学び、私が知らなかった話題に興味を持つことができました。最も重要なこととして、私はSWY参加者や関係者と強い関係を築き、今、世界中の友人がいます。彼らと連絡を取り合い、すぐにでも彼らに会いにいくつもりです。彼らも、いつでも私を訪ね、滞在していいと分かっていると思います。

Matthew Maynard Renata from New Zealand



私は、グローバル化されていく社会の中で活躍できる様、広い視野で物事を見られるような女性になりたいと思い、退職後約1年間、世界各国で様々な活動を行ってきました。SWYもそのひとつです。自身で経験した海外体験とSWYでの体験で大きく違う点は「真の多様性とは何か」を肌で感じ、更に「自分が地球に生きる社会の一員である」と認識したことだと思います。SWY以外の海外体験でもたくさんの国の人と出会い、異なる文化や価値観とふれあい、新しい気づきや学び、カルチャーショックがたくさんありました。それらの体験や苦労を通して自分は多様性を目の当たりにし、違いを受け入れグローバルな視点で物事を見られるようになったと思っていました。

しかし、SWYでの経験はそこから更に一歩進むことができるものでした。コースディスカッションの「Diversity and Inclusion」では社会的マイノリティにフォーカスをあて多様性と共生社会についてファシリテーターの下メンバーで話し合いました。特にここで得た知識や会話は私にとって良い刺激となりました。徐々に日々の生活の中でお互いの違いを尊重し、受け入れ、多様性を楽しめるようになっていきました。また、SWYならではの特殊な環境(世界の様々な地域から言語、歴史、経済力など全てが違う環境で育った11カ国の青年が外部から隔離された船上空間で共に生活をする)は参加青年同士に友達以上の絆を芽生えさせる力があると思います。そのため、世界が以前よりも身近に感じ、自分が地球に生きる社会の一員であることを意識することができました。多様性の大切さと面白さを知った今、このSWYで得た価値観を大切に、社会に対して私にできることが何かを考え、世界に広がる仲間とともにこれから行動に移していきたいです。

山下 まりや



SENTIMENTS

参加青年による感想

" 1st Sushi party in Lutsk. "

ウクライナデリゲーションによる、『Kawaii Japanese Club』プロジェクトが始動。日本の寿司作り体験・書道体験・千羽鶴プロジェクトなどを展開している。精力的に日本文化の促進に携わってくれている。

Lidiia Kozhevnikova



日本の高校生に世界を体感させ 英語力を鍛える Summer Camp

私は世界青年の船での経験を通して、より多くの若者にこういったプログラムの世界観を体感する経験をしてもらいたい、と考えるようになりました。自分は今回このような素晴らしい経験を参加青年としてさせてもらったので、「今度は自分が与える側になりたい」、そんな思いで私は今、タクトピアという教育系ベンチャー企業でインターンをしており、そこでイングリッシュキャンプというイベントの企画を行っています。そのイベントでは夏休みに世界トップクラスの大学で学ぶ海外大学生、例えばハーバード、オックスフォード、マサチューセッツ工科大学などの大学生、を日本に招待し、日本の高校生と共に 4 日間に渡って一緒に共同生活をしてもらい、高校生たちに世界最高峰の学びを体感してもらいます。今年の夏は大阪のような都会から、鳥取、山梨などの地方でも行う予定です。

幡谷 拓弥

鯉淵 健太郎

コース・ディスカッション 「青年のエンパワメント」での学びを活かして

私は事後活動として、コースディスカッション「青年のエンパワメント」で学んだことを活かし、学生向けのワークショップなどのファシリテーターなどを本格的に始めました。

8 月にはベトナム・カンボジアで行われるスタディーツアーにも、ファシリテーターとして参加します。

三浦 宗一郎



ドキュメンタリーの制作

たくさん話の中で気付いたこと、そして一番印象に残ったことが一つあります。それは太平洋の国々から来ていたニュージーランド、トンガ、フィジーの参加青年が皆声を揃えて「異常気象」、「地球温暖化」に対する懸念を示していたことでした。このトピックは決して新しいものではないかもしれませんが、こんなに身近に、「問題だ」、「改善すべきだ」と主張する人たちの熱意に圧倒された事はありませんでした。それだけではなく、その参加青年らは、自ら出来ることをやり始めており、例えば、好きなお肉を食べられなくなっても、ベジタリアンとして地球のため、私たちのホームのために貢献したいと、具体的なアクションを起こしていました。彼らの心の底からの想いが伝わってきました。

なぜベジタリアンになることで地球温暖化が防げるのか、例えば牛を育てるために牧草地が必要なので、地球上の熱帯雨林が牧草地に代わっていること、牛から得ることのできるたんぱく質を 1 (いち) とすると、牛が食べている飼料に含まれるたんぱく質は 10 (じゅう) であることが挙げられます。

さらに、ニュージーランドに到着し、現地の幼稚園生から大人まで幅広いいろいろな人と話す機会がありましたが、ここでも、地域、そして国単位で、この問題について、人々の憂慮を感じました。また、街の中でも、フェアトレードやベジタリアンフードが、普通にアクセスできる身近な所に見かけることができました。特定なテーマについて、他の国と日本を実際に見比べた事がなかったため、その大きな違いに驚きました。これらのエキサイティングな経験をもとに、自分が出来ることは何かと考え、私は二つのプロジェクトのプランニングを始めました。

一つは、知識ゼロから東京でベジタリアンの生活を 1 カ月ほど実践し、全てを自分の視点でドキュメンタリーを制作することです。レストランや実際にベジタリアンを実践している人や、賛成、反対双方の人をインタビューしたり、買い物に出た時どういった影響があるのかを体験し、ドキュメンタリーにしたいと考えています。これにより周りの人たちにも自分の食生活がどのくらい環境に影響を及ぼすのかを考えて欲しいからです。

第二に、これからニュージーランドに一年間交換留学するので、その期間で、更に大がかりなインディードキュメンタリーを制作できないかと考えています。なぜなら日本とニュージーランドの気象変化に対するアプローチの違いをもっと考えてみたいからです。同じような温暖化に影響されている国なのに、何故人の意識のレベルが違うのか、学生の視点から見た、面白いかつ現実的な情報を皆に共有し、認識を高めることができればと思います。

佐々木 珠里

内閣府青年国際交流事業一覧

内閣府の青年国際交流事業は、航空機による派遣・招へい事業及び船による多国間交流事業を通じた日本と諸外国の青年の交流により、青年相互の理解と友好を促進するとともに、青年の国際的視野を広めて、国際協調の精神を養い、次代を担うにふさわしい青年を育成することを目的としています。

各事業において、我が国及び諸外国の参加青年は、世界的視野に立った共通課題の意見交換、自国の文化の紹介などの各種交流活動や、産業・文化・教育施設の視察、ホームステイなどの活動を行い、友好、親善を深めます。

また、各事業に参加した日本青年たちは、日本青年国際交流機構(IYEO)を組織し、海外で得た貴重な体験をいかし、地域社会、あるいは職域などにおいて社会貢献及び国際理解・協力等の促進のための諸活動を行っています。

外国青年たちは、国ごとに事後活動組織(「東南アジア青年の船」事後活動組織及び「世界青年の船」事後活動組織)を組織し、様々な社会貢献活動や日本とのつながりを維持する活動を行っています。

国際青年育成交流事業

平成 5 年の皇太子殿下の御成婚を記念して平成 6 年から開始した事業であり、3 か国に日本青年を派遣しています。訪問国では、現地青年との社会事情に関するディスカッション、日本文化の紹介、施設訪問、ホームステイなどを行います。また、帰国後は日本に招へいた外国青年と共に国際青年交流会議(合宿形式でのディスカッション)に参加します。

日本・中国青年親善交流事業

昭和 53 年に日中平和友好条約が締結されたことを記念して、昭和 54 年度から開始された事業で、日本・中国両政府が共同で実施しています。中国に日本青年を派遣し、現地青年とのディスカッション、文化・スポーツ交流、各種施設の訪問、ホームステイ等を行います。また、日本に招へいする中国青年と交流する機会があります。

日本・韓国青年親善交流事業

昭和 59 年 9 月の日韓両国首脳会談における共同声明の趣旨を踏まえ、昭和 62 年から開始した事業で、両政府が共同で事業を実施しています。韓国に日本青年を派遣し、現地青年とのディスカッション、施設訪問、ホームステイを行います。また、日本に招へいする韓国青年と「日韓青年親善交流のつどい」に参加する機会があります。

「東南アジア青年の船」事業

昭和 49 年 1 月のインドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール及びタイと日本との共同声明に基づき始められた事業で、ASEAN10 か国の青年と船内や訪問国で共同生活をしながら、各種交流活動を行い、国際協調の精神の醸成と国際協力における実践力の向上を図ります。テーマに基づくディスカッションをメインプログラムとし、各訪問国では、表敬訪問やホームステイ等も行います。

次世代グローバルリーダー事業 「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」(世界青年の船)

世界各地から集まった外国青年と船内で共同生活をしながら、ディスカッションや文化交流等を通して、異文化対応力やコミュニケーション力を高め、リーダーシップ等の向上を図ります。また、訪問国では、ディスカッションのテーマに応じた施設訪問や現地青年との交流などを行います。

地域課題対応人材育成事業「地域コアリーダープログラム」

高齢者関連、障害者関連、青少年関連分野の社会活動に携わる日本青年を 3 か国へ派遣し、各分野の地域社会活動において中心的担い手となる人材を育成します。訪問国では、関係機関や施設等の訪問及び意見交換、派遣分野の事情及び背景や社会活動に関する先進的な取組みを学ぶほか、ホームステイ等による交流を行います。